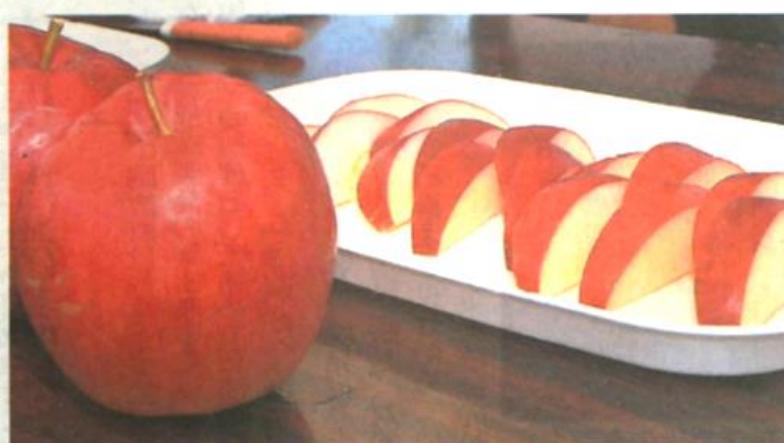


「紅はづみ」登録申請



りんご研究所が約5年ぶりに世に送り出す新品種「紅はづみ」

りんご研が新種リンゴ

甘さと酸味好バランス

黒石市の県産業技術センター「りんご研究所」は食味が良く、落果防止剤が不要なリンゴの早生種「紅はづみ」を開発、農林水産省に品種登録を申請している。認可は2018年の見込み。同研究所が約5年ぶりに送り出す新品種だ。

りんご研によると、紅はづみは、ともに早生種の「つがる」（種子親＝めしべ）と「さんざ」（花粉親＝おしべ）の交配。早生種としては濃厚な味で、甘さと酸

味のバランスのほど良さが特長。歯触りが良く、果汁も多いという。「未希ライフ」、「つがる」等の一部を代替する品種として、9月上

改良に25年、苦労が結実

県産業技術センター「りんご研究所」は、新品種「紅はづみ」の品種改良に約25年を費やした。一般に品種登録される確率は、植えた種の数で換算すると約5千分の1。手間と根気を要する取り組みだ。

りんご研は92年に「つがる」と「さんざ」を交配した。できた果実の種から幼い苗「実生」を育て数年後、藤崎町のほ場に定植。99年秋に初めて実を付けた。以後、りんご研は毎年、味や色、形、大きさ、日持ち、収穫量、障害の有無、落果などを評価、不適な個

体を順次淘汰していった。2003年までに残った一つか系統名称「青り26号」となった。後の紅はづみである。

その後、農家での現地適応性試験を経て16年、晴れて国への申請となった。

りんご研は89年前の1928（昭和3）年にリンゴ生産拡大と農家の収入のために品種改良を始めた。これまで40種余りの開発に成功した。

一方で初山慶道品種開発部長が「登録まで行くのは

エリート中のエリート」と指摘するように、職員の苦

なり、収穫前の落果が少なくて落果防止剤が不要なため、農家は手間とコストを抑えられるメリットがある。夏場、高温でも着色は良いという長所も持つ。

短所は果実の上、下部に「さび」と呼ばれるさざらした部分ができる点。日持ちも決して良いとは言えず気温20度で7日間と、つがると同程度という。

りんご研の初山慶道品種

木智哉さんは「みずみずしくおいしい」とPRする。

期待の新品種は7、8日に並んだ時の堅さが気にならない。成熟させると非常に

と前置きしながらも「店頭に並んでいたり、市場への浸透度が高く、売れているつがるに代わる」と栽培には慎重だった。

ようやく安心感があるのだ

くおいしい」と満足げ。

一方で弘前市のリンゴ農

家の男性（54）は「良い味

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

平成29年9月24日東奥日報掲載